

麻疹（はしか）

愛媛医療生協

麻疹は伝染力の極めて強い急性伝染症であり、手洗い、マスクのみでは予防できません。現在ではワクチン開始により稀な疾患となったが、年間数十人～数百人が罹患している。また、子どもが感染すると重症になる可能性のある病気です。

【原因】麻疹ウイルスの感染による

【感染経路】咳やくしゃみなどによる鼻、喉からの飛沫感染、空気感染、接触感染

【潜伏期間】10～12日

【伝染期間】発病前3～4日から発疹出現後2～3日で、カタル期が最も強い

【症状】1. 典型的麻疹

カタル期（3～4日） 38℃以上の発熱ではじまり、乾性の咳・鼻汁などの上気道炎症状と、口腔粘膜充血、羞明・結膜充血・眼脂などの結膜炎症状が出現します。3～4日目には「コプリック斑」といって乳カスのような斑点が頬部粘膜に現れます。発熱は一旦下降傾向を示した後、再び39℃～40℃の高熱（二峰性の発熱）と共に全身に発疹が出ます。

発疹期（4～5日） 発疹は頸部、顔面から始まって、規則正しく下降性に広がり、腕・上胸部・腹部・下肢へと拡大します。カタル症状も増強します。発疹は境界明瞭な紅色斑状丘疹で一部融合して健康皮膚面を残します。

回復期（3～4日） 発疹は出現した順に顔面から消えていきます。発疹の色は、はじめは鮮紅色ですが、暗赤色・暗褐色へと変化して色素沈着、秕糠様落屑が始まり、1～2週間で色素沈着も消えて治癒します。

2. 非定型麻疹

- 1) **重症出血性麻疹**：ごくまれではありますが、急激に発病し、高熱、けいれん、意識障害、呼吸困難とともに出血性の発疹を見ます。DICにより全身から出血し死にいたる重症型です。
- 2) **内攻型麻疹**：麻疹の経過中に気管支肺炎に心不全が加わり、循環障害に陥ったもので、発疹が急速に消え、蒼白、四肢冷感となり、数時間以内に死亡します。
- 3) **修飾麻疹**：生後3～8カ月の乳児で母体からの移行抗体が残存している場合や、潜伏期にガンマグロブリンの接種を受けると、一般的に軽症で、潜伏期が延長し、コプリック斑も不明瞭で、熱も3

～4日と軽くなります。

【治療と看護】

特異的な治療法はないので、熱、咳、痰など症状に応じて対症療法を行います。治療をする上で重要なことは合併症の防止です。

※熱がある間は安静にします。解熱後も合併症予防のため少なくとも3日間は安静にしましょう。

※羞明があるので直射日光は避けます。

※高熱時には氷枕・氷嚢を使用しましょう。

※うがいで口腔内を清浄化しましょう。

※有熱期間が長いと、食欲がなくなり体力も消耗するので、栄養補給に努めましょう。水分を十分にとり、栄養価の高い食品を、消化吸収を良くするために流動～半流動食で与えましょう。

【隔離期間】 解熱した後3日を経過するまで

【合併症】

麻疹にかかると、感染に対する抵抗力が低下し、ウイルスの重複感染、細菌の二次感染が起こりやすくなります。発熱が発疹出現後4日以上続く、または、一旦解熱後に再び発熱した場合は合併症が疑われます。

①**気管支炎・肺炎**：麻疹ウイルスそのものによって起こる巨細胞性肺炎は免疫不全状態の時に見られる間質性肺炎で、麻疹ウイルスが肺に持続感染したもので、予後不良です。発疹期を過ぎても解熱せず、呼吸困難、激しい咳があれば、細菌の二次感染による肺炎を考慮し、胸部X線検査、血液検査を行います。細菌感染が示唆される場合は早期に抗生剤を投与することが必要です。

②**中耳炎**：鼓膜所見の観察が重要で、発症すれば抗生剤を投与して治療します。

③**脳炎**：2000～3000人に1人の割合で認められます。麻疹ウイルスが脳を直接侵して発症します。麻疹の重症度とは関係なく、多くは発疹出現後2～6日までに、痙攣、傾眠、昏睡、異常興奮、発熱などの症状を伴って発病します。死亡率は10～20%です。

【予防法】

麻しん風しん混合ワクチン：1歳以上2歳未満、小学校就学前の1年間の2回公費で受けられます。麻疹は重い病気なので、できるだけ早く予防接種を受けましょう。

筋注用ガンマグロブリン：接触後6日以内なら、発症防止ないし軽症化が期待できます。
(2020.5.7)